

# 文化をもとに「アジア」を世界単位へ その原動力となるのは京都である

昨年11月にプレシンポジウムがもたれたが、今年「東アジア文化都市2017」が日本の京都市、それに韓国ソウル、中国長沙市がそれぞれに韓国ソウル、中国長沙市がそれぞれに本格的に実施される。

昨年の世界の大きな話題に、イギリスの欧州連合(EU)離脱がある。一世紀前、日本人を母に持つカレルギーによって唱えられたヨーロッパの統合は、今や欧州経済共同体(EEC)や

がEUとして結実した。欧州は新しい歴史を歩んできたのだが、そこにはころびが生じたのである。これと合わせて、拡大し続ける中国、新しい大統領になるアメリカ、世界がどこへ向かうとするのか、いっそう読めない時代になったように思う。

歴史学での「東アジア」は、日本列島・朝鮮半島・中国大陸をいう。漢字・仏教などを共通の文明として、互いに

## 「恩」ということの大切さ

私は40数年前、東山三十六峰の一、六條山に納骨墓所を創設しましたが、今や50万人の檀越が参詣する世界一の聖地となりました。

そして昨年11月9日、第14世ダライ・ラマ法王が初めて六條山の当東本願寺に参詣されました。東本願寺とチベットとの縁は深く、明治期に私の曾祖父、東本願寺22世現如上人が、第13世ダライ・ラマ法王への親書を託し、わが

国初のチベットへの公式な使者として、能海寛を派遣したことに始まります。百有余年の時を超えて、第14世ダライ・ラマ法王と共に、われわれも大乘の祖師龍樹菩薩の流れを汲む者として、この御堂にて御本尊を拜し、仏法を語り合えた仏縁を、深く喜んでおります。われわれは日常、インターネットのサイトやテレビ、新聞などで、種々忌まわしい報道を見聞きしますと、数人

## 美しいものが日常の中にある生活 京都は、これを忘れないでほしい

私たち日本人は生活の中に美しいものを取り入れるのが上手だといわれてきた。ハレのよそ行きだけでなく、何気ない日常の道具や生活の佇まいの中に美しいものがたくみに取り入れられていると、世界から賞賛されてきた。

私は、倉敷で大原美術館のほか、倉敷民芸館の運営にも関わっている。そこには、美しいものを見いだす卓越した眼差しを持っていた柳宗悦と同志たちが、庶民の暮らしの中から見つけてきた、器・カゴ、ザル、織物、家具、道

## 見失っている人間個人の余裕

香港はチャイニーズドリームを狙う者たちの玄関口である。大企業だけでなく、世界各地からさまざまな交易人たちが集まる。

日本から香港に中古自動車を押し、アフリカ相手に商売をしているパキスタン人社長と会食をした。日本で長年商売をした彼は、「不幸せな日本人」について滔々と語った。日本人は真面目だが、常に生活や人間関係の維持に

汲々として、余裕がまったくない。タンザニア人のセム(仮名)は、香港の企業に他のアフリカ系交易人を仲介したり、アフリカ系商人から注文された品を香港や中国本土で探して輸出するディーラーだ。セムは、取引相手であるパキスタン人社長との約束に3時間も遅れても、社長の椅子に座りセムル写真を撮っておどけ、社長が現れ説教されても「あいつはすぐ怒る」な



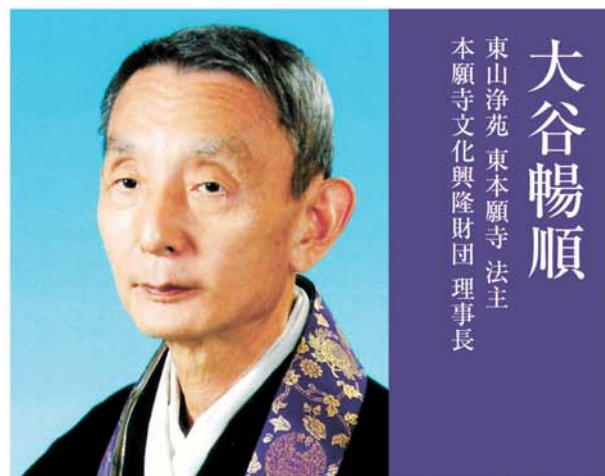
井上満郎  
京都市歴史資料館館長  
京都市埋蔵文化財研究所所長

影響を及ぼし合いながらその歴史を形成してきた。しかしその統合がアジア(政策課題)になったことは一度もない。日本が国際社会に入ってから20年、なるほど明治以後「アジア主義」と呼ばれる思想が現われはしたが、具体化する事はなかった。

混在しつつも地域や民族がそれぞれ独自の社会を築き、時には衝突しながらのアジアの歩みは、確かに統合という概念とは相容れないように見える。しかしアジアはそれだけではないのだ。若さには過ちが伴う。いさかきも起る。だが若さは未来そのものであり、そこ

へ向かう大きなエネルギー、可能性をアジアは秘めている。

その時基となるのが文化である。シルクロードは、一本の細い道ではあってもアジアを東西に貫き、人と文化の交流に貢献した。地域や民族が自分たちだけで歴史を形成したわけではないのであり、豊かな交わりがアジアにはあった。そうした交わりの果実の文化をもとにして、アジアは一つの世界になることができる。むしろそれは国家の統合といったことではなく、アジアという、ヨーロッパの影として低められ、長く目覚めることになった



大谷暢順  
東山浄苑 東本願寺 法主  
本願寺文化興隆財団理事長

で集まってそれを語り合い、大いに慨嘆し切歯扼腕して、世を嘆くことがあります。しかしそんなことをしても、世の中は少しも良くなりません。

実はこのようにして、われわれは不幸の種を探し、われわれ自身を不幸に追い込んでいっているのです。これほど愚かなことはいないではありませんか。

人世の目的は、仕合わせになることである。当日法王と私は語り合いました。そして仕合わせになるためには、思いやりの心が肝心であります。思いやりの心とは、畢竟、恩を感じ合うことにはかきまかせません。「恩」と

いうことの大切さを、久しくわれわれ日本人は忘れていたのではないでしようか。

恩については、父母の恩、国王の恩、師友の恩、衆生の恩、また天地自然の恩などということが報かれます。

それに「報恩」恩に報かれます。「知恩」恩を知る、恩の熟語がありますが、私には「報恩」恩は感じないかと思っております。

恩は元々梵語の Dāna, upakāra などの仏教経典の言葉を翻訳するにあたって、この漢字を充てたものかと思っております。これらには、「恩を感じ



大原謙一郎  
大原美術館 名誉理事長

具類などが展示されている。これらの品々の美しさは格別である。本堂に、生活の中に美しいものが根付いているのだと、改めて感じさせられる。しかし今、私たちの周囲を見回してみると、生活の中に美しいものが上手に取り込まれていない感じがする。少くも心もなくなっている。昔の美しい生活が今に残っていないことを嘆いているわけではない。いまさら、昔ながらの煩悩にくつろぎのある生活に戻れるわけでもない。

しかし、それならば、今の日常の中に「生活に美しいものを取り込む」と

いう思いが生きているだろうか。今の時代の生活様式の中に、新しい美しさが生まれているだろうか。

心もとなない、そこである。

もちろん、希望がないわけではない。今でも、美しい生活を守ろうと頑張っている街は全国に少なくない。私の住む倉敷もその一つでありたいと思っております。さて、それでは、肝心の京都は大丈夫だろうか。大丈夫であってほしい。京都には日本の文化首都として、生活の中に新しい美しさを取り込むチャンピオンであり続けてほしい。倉敷とか、その他心ある町々の大きな兄貴分として、日本の心の佇まいを体現し、日常生活を美しく保つ街であり続けてほしい。私たち地方の民は、心からそう願っている。

京都は、大伽藍がそびえ国宝重文が溢れる堂々の文化首都である。同時に京都には、生活の中にも文化首都の香りがにじみ出る、美しい街であり続けてほしいと思っております。

「日本人の忘れ物は、京都では、忘れ物やおまへん」と胸を張って言い続けていただいているのは、京都は全国から仰ぎ見られる文化首都たり得るのではないだろうか。



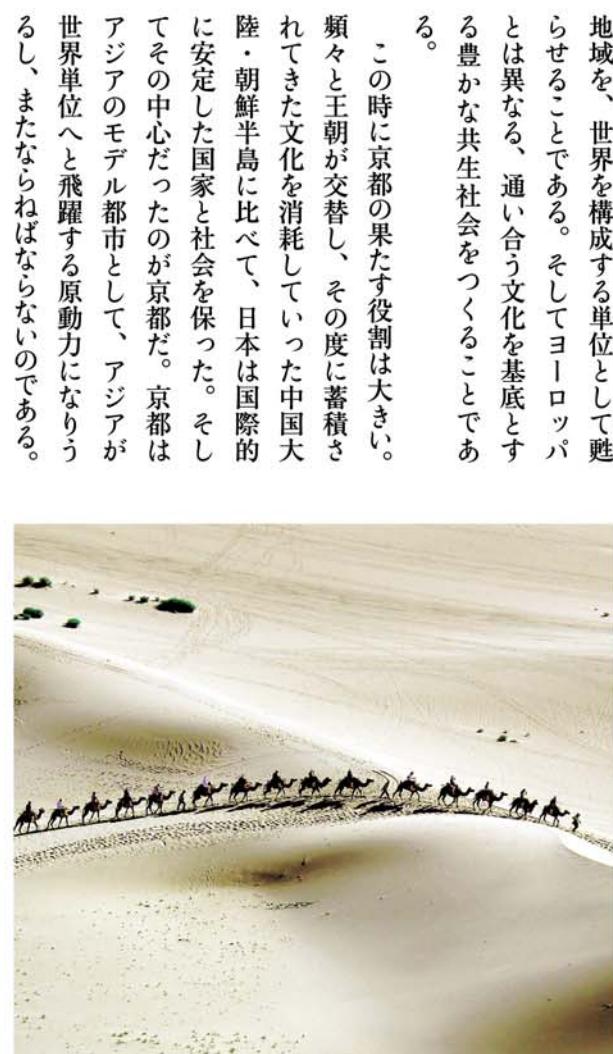
小川さやか  
立命館大学大学院  
先端総合学術研究科 准教授

どと平然とする。社長が自分をないがしろにしたら、15カ国のアフリカ系交易人とのネットワークと立ち去るだけだ。

セムたちディーラーは、びっしりと電話番号を登録した携帯を2、3台持つ。アドレス帳には石油企業の社長から大物政治家、詐欺師や囚人までいる。どの人も等しく大事だ。詐欺に遭った時に適切なアドバイスをくれるのは詐欺師かもしれない。この関係は、自然に増殖したものらしい。日常的に顔をあわせる関係は、日々の小さな貸し借りを潤滑油としてうまく回っている。

その他はいつどのような形で「貸し」が返ってくるか分からない関係であり、その大半は「スリッパ」状態だ。だが、数十年ぶりでも、その誰かが自分を助ける、あるいは自分が誰かを助ける可能性があるれば、即興で友情は目覚めるようだ。相手が乗り気じゃないなら、別に構わない。綱に投げた SOS は、バラエティーに富んだ仲間誰か一人くらいは受け止めてくれる。そういう感覚で、一つ一つの関係に過度に期待しない。その軽さが、自律的な「セーフティネット」の基となっている。

セムたちには、人生が安定すると錯覚させる制度的保障はないし、国家や企業が権威付ける社会的地位もない。彼らはそうしたものに余裕の根拠を求めない。現在、日本人は保障を求めなくなっているように思える。着信もメールも親切を受けた「借り」も返さないと不安になる。個々の人間関係に確実な互酬性を求め、維持する関係が増えるほどに窮屈になる。制度に過度に期待させられることで見失っている人間個人の余裕を、「日本人の忘れもの」としたい。



●いのうえ・みつお  
1940年、京都市生まれ。京都大学博士課程修了。京都産業大学教授などを経て現在、同大名譽教授、京都市歴史資料館長、市埋蔵文化財研究所長。専門は日本古代史、京都歴史・京都文化。2009年11月、京都新聞大賞(文化芸術賞)受賞。11年11月、全国社会教育功労者文部科学大臣表彰。著書に「桓武天皇」「平安京の風景」「古代の日本と渡来人」など。



●おおたに・ちようじゆん  
1929年、京都生まれ。東京大学文学部、ソルボンヌ高等学院卒業。パリ第7大学博士。名古屋外国語大学名誉教授。フランスバルム・アカデミック勲章叙勲。現在、本願寺文化興隆財団理事長、東山浄苑東本願寺法主、ジャポニスム振興会会長。「歴史に学ぶ蓮如の道」「人間は死んでもまた生き続ける」など著書多数。ジャンヌ・ダルク研究者でもある。



●おおはら・けんいちろう  
備中倉敷の商家の9代目。神戸に生まれ、小学校から京都で過ごす。洛星高等学校卒業後、東京大経済学部、エール大(アメリカ)大学院に学び、1968年倉敷レイコン(現クラレ)入社、副社長を経て、1990年中国銀行に転籍、副頭取を経て99年退任。現在、大原美術館名誉理事長、倉敷民芸館理事長、倉敷芸術科学大客員教授。



●おがわ・さやか  
1978年、愛知県生まれ。京都大アジア・アフリカ地域研究科博士課程指導認定退学。博士(地域研究)。立命館大学大学院先端総合学術研究科准教授。専門は文化人類学。著書に「都市を生きぬくための救済」「世界思想史」2011年・第33回サントリー学芸賞、「『その暮らし』の人類学」(光文社新書、2016年)。